

Title	<書評> 宮崎市定『中国史』 下
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学学報. 75(3) p.155-p.168
Issue Date	1988-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81190
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

宮崎市定『中国史』下

勝 藤 猛

Miyazaki Ichisada, *Chugokushi* (A History of China), Part II

Takeshi KATSUFUJI

15 専制と独裁

〈始皇帝は偉大なる専制君主であった。私がこれを独裁と呼ばないのは、宋代以後の独裁君主制と区別するためである。私の考えによれば、宋代以後は、制度として、法的な独裁君主が出現した。もちろん開国の君主は、その個人の才能によって、個性のある独裁を発揮したのであるが、そのやり方がそのまま制度となって、子孫の代に踏襲された。この場合、独裁君主は、制度上、最後の決裁を与えるだけの機関になっており、すべての政策はそれぞれの下部機関によって膳立てされ、最後に宰相がこれを審査する。もし天子として二つ以上の決裁の方法があると宰相が考えれば、その案を併記して原案を作成し、君主に最終的な裁断を求めるのである。しかるに、古代および中世にあつては、まだそのような政治様式が制度として成立していない。君主は個人の力量によって専制を行うが、その死とともに、まったく新しい局面を生み出す。後嗣が暗弱なれば大臣がそれを助けるが、それは人間的な信頼をたのみとするだけである。もしこの信頼が揺らげば、とんでもない結果を招くことになる。〉〔上、154－5頁〕

〈明の太祖とその子成祖永楽帝の政治は、これを君主独裁というが、実はこれは宋代の君主独裁制とは甚だ性質の異なるもので、むしろこれは、古代的な専制政治の復活というべきであろう。我々が考えている中国近世の君主独裁とは、君主が最後の決裁を下す政治様式をいうのであって、すべての政務は、官僚が案を練りに練り、つぎに大臣がこれに審査に審査を重ね、最後に天子のもとに持ちこんで裁可を請うのである。だから天子が自ら積極的に発議することはむしろ稀である。ところが古代の専制君主、たとえば秦の始皇帝などは、自己の意志を主として、その実現方法を大臣に問い、大臣の提議が気に入ればこれを実行させる。もちろん自己の意志をただちに大臣や側近に伝えて実施させることも可能である。始皇を嗣いだ二世皇帝のような暗愚な天子でも、大臣李斯を殺すことができた〔156頁〕。太祖や永楽帝の政治はこれに近い。〉〔465頁〕

〈これらの新法は、決して王安石が個人の考えで創りだしたものではない。それぞれの改革には

別に提案者があり、それは多くの場合、名を知られない民間人であって、経験の上から改良策を思いついて上言したものである。王安石はよくそれらの意見に耳を傾け、上は天子、下は官僚と相談し、熟慮の末に断行したものであった。ここが王安石の政治家として傑出した点であり、現今でも、政治家ならば、本当に被害を蒙りがちな下層の人民の意見を吸い上げて、それを政治に役立てるの でなければ、本当の政治家ではない。〉〔349 頁〕

「専制」と「独裁」とはよく似ていて、一見区別しにくい、著者の叙述をこうして並べてみると、その違いがよくわかり、宋代、とくに神宗・王安石の時代が、中国史上最良の時代であり、その政治が「君主独裁」と名づけられているものの、現代の民主政治に近いことを知るのである。

16 都市と農村

〈蔡京は景気の成り行きに対して重大な関心をもっていた。ただし彼の景気は、資本家の景気・大都市の景気であって、地方の田舎に住む貧乏人は、その犠牲となって放置された。彼の政策は、できるだけ地方で搾取を行って、その収入を都へ運んで浪費するにあった。こうすれば、天子の膝元である都では、好景気に浮かれて、人民が太平を謳歌すること請け合いである。宋代の天子は、その独裁権を擁護するために、政府を経由せざる直属のスパイ機関をもち、皇城司と称せられた。これが民間へ出て、世論を収集して報告するのであるが、その範囲は都の周辺に過ぎず、遠隔の地までは耳目が及びようもなかったのだ。……地方の人民はどんなに苦しいが、そんなものは世論となって聞こえて来はしない。都会の群衆こそが、政治の品定めに発言する権利があるのだ。世論の形成に決定的な役割を果たすのは、知識階級と官僚群である。蔡京はその動向にも細心な注意を払った。官僚間で人気を得るには、彼らがもっとも欲するもの、つまり官位を、惜しみなく与えるに如くはない。……こういう官職に対して、正規の俸給が支払われるのはもちろんであるが、そのほかにも種々の格別の賜与がふるまわれた。……これでは、日の当たる部分は、インフレ景気に酔うことができるが、日の当たらぬ部分は、みじめな経済恐慌の波をかぶって呻吟しなければならないのだ。しかし果たして彼らには、こういう跛行景気に対して抗議する方法がなかったのだろうか。それは実は大いにある。まず最初は秘密結社に流れこんで、塩などの専売品の密売買をすることである。そして機会をねらって、どこかに反乱の火の手でも上がったときには、すぐそれに参加して、仇討ちする手を考える。〉〔360—2 頁〕

語気鋭く都市と農村の対比を指摘している。農村を犠牲にした都市の繁栄、政府の関心の範囲が都市であって農村に及ばないことなどは、現在もそうであろう。

吉川幸次郎「二つの中国——中国の都市と農村——」（『世界』1949年8月、のち『儒者の言葉』、全集16）にも、この問題についての明快な文章がある。著者は、自ら経験した都市のぜいたくと、垣間みた農村のみじめさとを描く。そして農村の窮乏にともなう不満は、土匪という形でそのはけ口を求めるといふ。一例として、著者は江蘇省淮安で会った古本屋親子の会話を紹介している。

子（著者に問う）「日本にも土匪はいますか」

親（自分が先に答えて）「土匪のいない土地なんて、この世の中にあるものかね」

この中国文学者は、中国史における百姓一揆の意義について、的確な評価を下している。一揆の第1段階は明の太祖朱元璋、第2は洪秀全の指揮した太平天国、そして第3が中国共産党であるとする。共産党による政権樹立の直前に執筆されたこの論文の末尾には次のようにある。「疾風枯葉を巻くごとくに農村を席捲してきた中共は、今や都市にはいらんとする。都市の生活は都市の生活で、なかなか根づよいものをもっている。それがいかに対処されるであろうか。明の太祖のごとく、みずからも都市的な方向へ変貌するであろうか。しないであろうか。そこから先のことは、もうすこし時間の推移を待とう。」彼らは都市の権力者となって、案の定、墮落してしまった。歴史の法則に従えば、彼らは農村に起こる新しい勢力によって打倒されるはずであるが、これもやはり時間の推移を待たねばならない。

17 紙幣の発生

〈宋代になると、商業の活潑化に伴って、地金貨幣の外に、有価証券が貨幣的用途をもつようになった。はじめ四川省地方で、富豪らが私的に交子なる現銭預り証を発行し、これを持参する者には、なにびとを問わず、一見〔いちげん、初対面〕払いに応じた。……政府は民間資本家の交子発行を停止し、政府の責任において、自ら交子を発行することを始めた(1023年)。これが世界における紙幣の始まりである。〉〔312－3頁〕

これと同じ現象が、9世紀、アッバース朝治下の西アジアにおいて見られる。

We hear of banks with a head office in Baghdad and branches in the other cities of the Empire and of an elaborate system of cheques, letters of credit, etc., so developed that it was possible to draw a cheque in Baghdad and cash it in Morocco. In Basra, the main centre of the flourishing eastern trade, we are told that every merchant had his bank account and that payments in the bazaar were effected only by cheque and never in cash. (Bernard Lewis, *The Arabs in History*, Hutchinson Univ. Library, 1968, p.91.)

小切手や手形のような有価証券が通用するのは、安定と信用のある社会においてである。そうでなければ、紙切れに金額を書いたものなど価値はないし、銀行に預金することもない。不安定な社会にあっては、隠すことができ、いつ・どこでも価値の変らない物、例えば金銀・宝石・じゅうたんという形で、財産を保存する。これは現在も世界でかなり行われているものと思われる。

宋代における貨幣経済の盛行について、次のように述べられている。〈宋代になると、最初の宋通元宝銭から以後、各代の年号名を鑄込んだ銅銭が、きわめて多量に、中国はもちろん、日本においてさえ見出され、そのために宋銭の骨董的価値は、はなはだ低くて、ほとんど言うにたりない。〉〔311頁〕

〈1976年、朝鮮の木浦〔モクポ〕に近い新安沖に、中国の海船が沈没していることがわかり、船

荷の引き揚げが始まり、……銅銭10万枚ほどが発見された。その銅銭の多くは宋銭であるが、もっとも新しいものは元の武宗の在位4年間(1308—11年)に鑄造された至大通宝であるところから、この中国船はおそらく、当時としてもっとも売行きのよい商品を積んで日本に向かう途中に、ここで沈没したものと推測されている。したがってこの銅銭も、もし船が沈まなかったならば、おそらく日本へ着いて、金か銀かと交換するため、日本に陸揚げされたにちがいない。事実、日本の各地から、宋銭を主とし、元・明のものを含む多数の銅銭が発掘されたという報告に接すること、しばしばである。〉〔421—2頁〕

これに関連した最近のニュースとして、1987年5月、JR京都駅前から、1万5千枚の古銭が発見された。すべて中国からの輸入銭で、天聖通宝・大観通宝などの宋銭が中心であり、もっとも新しいのは、1310年に鑄造が始まった元銭、至大通宝であった。

なお本書で、唐代の銭の一種を「開通元宝」銭と表記している。この読み方について、『旧唐書』食貨上に、「武徳四年七月、……行開元通宝銭。……其詞、先上後下、次左後右、読之。自上及左、廻環読之、其義亦通。流俗、謂之開通元宝銭」とある(左右の言い方は我々が見るのと逆)。

中国の貨幣は、材料は銅、作り方は鑄造、形は円形方孔であり、西方のそれが金銀を叩いて作るのと相違する。

18 王安石とその時代

〈宋は、南宋150年、北宋とあわせて、317年の命脈を保った。宋の歴史は、その文化とともに、長く後世に模範を垂れた。……宋代の文化・社会が高度に発達して、それ以後、長く飛躍的な進歩が起こらなかったことは、事実のようである。……すでに文化の進展が足踏みすると、それ以後の歴史は繰り返しのほかならないことになる。……宋の繰り返しが明であり、元を繰り返したのが清である。さらにこの4王朝がいずれも近世の王朝であるという点において、後継の3王朝は、どこかで宋の繰り返しを行っているという感が深い。歴史というものは、あらゆる角度から見直し、検討を加えることによって理解を深めることができるものなのである。このような考察を加えるとき、根本の標準となるのは宋代の歴史である。私が必要以上と思われるかもしれないほどの頁を、宋代のために割り当てたのは、このような理由による。〉〔412—4頁〕 そのとおり、本書下巻の宋・元・明・清・計241頁のうち、宋が112頁、半分近くを占める。

明を宋と比較している。〈明代の政治上にはなほだ好ましからざる現象があらわれたが、それは天子がわけもなく簡単に大臣を殺す恐怖政治である。これは宋人には思いも及ばぬ異変で、宋の太祖は、贓罪〔収賄罪〕以外では決して士大夫を殺さぬことを誓ったといわれ、死罪に相当する者でも、嶺南の気候の悪い地に配流して苦しめるにとどまるのが普通であった。ところが明代には、大臣・官僚が牛豚のように屠殺されることが珍しくない。そしてそれを始めたのが太祖であった。〉〔450頁〕

宋代政治の立派さの第一の貢献者は王安石である。〈彼は仁宗のとき、天子に上書して、政治改革

の必要なことを説いたが、この「万言の書」は天下の名文と称せられる。>〔340頁〕宮崎市定『政治論集』（中国文明選、11）朝日新聞社、1971年により、その内容を紹介する。

「万言書」の主題は、「方今之急、在於人才而已」というように、人づくりである。それを実施する際の要諦として彼が強調するのは次のことである。「慮之以謀」(自分でよく考え、人の意見も十分に聞く)、「計之以数」(計画するには、印象や感情に頼ることなく、数字にもとづく)、「為之以漸」(実行に当たっては、急ぐことなく、十分な時間をかける)、「勉之以誠」(努めるには誠意をもってし、私利私欲を捨てる)、「断之以果」(一旦決まったことは、多少の反対や障害があっても断行する)。この教えは現代日本の指導者にも通用する。

王安石は人材養成を次の4項目に分ける。

1 教之（教育）

苟不可以為天下国家之用，則不教也。（教育は機会均等でなくてよい）

人之才，成於專，而毀於雜。（工・農・商・士の専門別にやる）

先王之時，士之所学者，文武之道也。（武のなかで射と御を重んずる）

今之学者，以為文武異事，吾知治文事而已。（今の人は勉強だけを重んじ、スポーツを軽視しているのは、よくない）

2 養之（待遇）

饒之以財（凡人は、貧しいと小人になり、豊かであると君子になる）

約之以礼（天下の人は、奢を榮とし、儉を恥としているが、これはいけない）

裁之以法（礼に従わない者は、流刑か死刑に処する）

3 取之（採用）

随其德之大小・才之高下，而官使之。

4 任之（任免）

智能才力之士，則得尽其智以赴功。・・・無能之人，固知辭避而去矣。

至其任之也，又專焉而不一一以法束縛之，而使之得行其意。（一旦ひとを任命すれば、その人に自由に腕を振わせ、うるさい干渉をしない）

王安石は現状をなげいていう。「天下在位之人，未有乏於此時者也」「不才苟簡貪鄙之人，至不可勝数」そしてこの教育改革を実行すれば、上に引いたように、「無能の人は、固より辭避して去るを知る」ようになるという。しかしそううまくはいくまい。無能の人こそいつまでも自分の地位に居坐るのが常である。また上記3の「其の徳の大小・才の高下」は、だれが判定するのか。教育改革論が理想を並べた作文に終るのは、現代日本も同様である。

王安石の政策を説明しているキー・ワードを拾ってみる。「合理主義」「財閥の寡占体制を匡正する」「資本家退治でない」「弱者の利益を擁護する」「社会主義的で、政府の統制が厳しい」

彼の新法のうちもっとも重要なものは、募役法である。これは、従来の税のなかに、徭役すなわち労働奉仕が含まれていたのを廃し、かわりに錢を納めさせるもので、現今の税制、つまり「税金」

につながる画期的な改革であった。しかしこれは旧法党によって廃止され、徭役は宋代以後も残ることになった。

〈元豊年間は、神宗もすでに30歳代となって親政し、王安石は現今の南京の郊外、半山に隠棲した。〉〔350頁〕半山は、南京の東門と鍾山(蔣山)の中間にあったため、こう呼ばれ、彼はそれを号とした。

〈王安石は詩人であった。〉〔341頁〕彼の作品はいくつかに分類され、その一が閑適といわれ、次のような名句がある。

「緑陰幽草勝花時」(初夏即時) 「一鳥不鳴山更幽」(鍾山即事)

詠史の類として、王昭君をうたった「明妃曲二首」の中の

「君不見咫尺長門閉阿嬌，人生失意無南北」(其一)

「漢恩自淺胡自深，人生樂在相知心」(其二)

は、彼が北方民族に対して偏見をもたなかったことを示している。阿嬌は、上篇の項目12「漢の武帝の妻たち」の中の陳皇后である。

また〈兼併と題する古詩がある。〉〔349頁〕その要点は次のとおりである。「三代子百姓，……人主擅操柄，……兼併乃姦回，……後世始倒持，……利孔至百出，……民愈可憐哉。」

新法党と旧法党との間に激しい政争がおこなわれたものの、それによる流血がなかったのは、世界史上特筆すべき美徳である。これは王安石・司馬光たちの人格がすぐれていたからであろう。

この兩人の評価は、始めは後者が、後には前者が、高い。元田永孚『幼学綱要』1882年(岩波文庫，1938年)は、明治以後の日本人の道德形成に大きな役割を果たしたもので、この中に模範的人物として、司馬光は採られているが(甕を割って子供を救った話)、王安石は入っていない。

中国においては〈清朝末期に、梁啓超が『史伝今義』を出し、そのなかに王荊公伝〔荊国公に封ぜられた〕を収め、蔡上翔〔清朝の考証学者〕の説を敷衍して、大いに世に行われた。これによれば、王安石は中国歴史上における第一等の人物であり、これに反し、従来、人格者と目されてきた旧法党の政治家は、他人の才能を嫉妬する小人輩にされてしまったのである。以後の評価はおおむねこれを踏襲し、現今の中国においても、王安石の評判は高いようである。〉〔353―4頁〕

19 戦争と平和

中国と北方民族との和戦の問題について、宮崎著書と、尚鉞(主編)『中国歴史綱要』北京，1954年とを並記してみる。

〈遼の聖宗は、宋の3代真宗のとき、大挙して南侵し、国境を破って黄河に到達し、澶州を囲んだ。真宗もこれに対し親征して、黄河を挟んで遼軍と対峙した。宋軍は野戦では勝利に自信がないものの、城壁によって防衛する際には、相当の抵抗力を示す。そこで遼軍とても、中国征服の目算も立たぬまま、宋からの和睦の提議に応じ、いわゆる澶淵(澶州の別名)の盟約が成立した(1004年)。宋か

らは、以後毎年、銀10万両、絹20万匹を歳幣として贈り、互いに国境を侵犯しないことを誓約した。……歳幣は経済的の負担でもあり、不名誉な義務には相違ないが、しかし平和の代償と思えば、とくに高価に過ぎるものではなかった。経済的先進の大国である中国が、発達途上国の遼に対して、経済援助の無償贈与を行って悪い理由はなかった。〉〔309－10頁〕

「真宗景德元年(1004)、遼兵南侵、深入到開封以北不遠的澶州(河南濮陽)。宋朝君臣大驚失措、有的主張遷都金陵(南京)、有的主張遷都成都。宰相寇準堅決主張宋真宗親征。真宗不得已、到達前綫。當時的形勢是:遼兵雖然号称20万、但係孤軍深入、糧餉不繼、專靠劫掠人民來供給。所過城市、只攻下兩城、其餘諸州、都在宋兵堅守中、隨時可以出擊、截斷敵人歸路。陸續集結在澶州附近的宋軍達數十万、士氣旺盛、首次接觸、射殺遼大將撻覽、遼兵後退。這一次戰爭、本可大獲勝利、然而却竟在漢奸和失敗主義者的積極活動下、与遼訂立一個屈辱的和約:宋每年送遼絹20万匹、銀10万兩。這就是所謂“澶淵之盟”。」(197頁)

南宋と金との関係については次のようである。〈高宗は表向きは、2聖、徽宗と欽宗とを奪還するのだと言って、部下の軍人たちを鼓舞するが、本心はどんな条件下でも和睦して、できるだけ領土を確保したかったのである。こういう天子の本心を見抜いて天子に近づいてきたのが秦檜である。……彼は熱心に和議を推進した。……しかしいざ実行に取りかかって、交渉のために使節が往来するようになると、俄然反対の世論がやかましくなる。直接に天子を攻撃することはできないので、責任者である大臣の秦檜や、これに賛成する弱腰の政治家を、国賊のようにきめつける。強硬論の方が景気がよいので、太学生とか、まだ地位を得ていない知識人が、みなその方へ付いて騒ぎだす。こういう中であって、反対を押し切って和議を成功させた秦檜の力量は、大したものであったのである。〉〔375－6頁〕

「宋高宗……對外採取屈辱求和的態度、起用漢奸秦檜作宰相、繼續派人向金人求降。……岳飛上書指出“金人不可信、和好不可恃、”大遭高宗和秦檜的深切嫉恨。他們一意投降、拜表稱臣於金。」(231・3頁)

この両者の見解の相違は何から来ているか。尚鉞がこの著述を開始したのが1950年、中華人民共和国成立直後、漢族・中国共産党の支配が成立し拡大しようとする時で、当然、中華思想と軍国主義が盛んで、「経済的先進の大国」の寛容さはなかった。戦争によって被害をこうむるのは結局は人民である〔378－9頁〕。

20 元朝の帝位継承

元朝の中では“帝位継承の内訌”という項目が立てられている〔431－3頁〕。元朝は1260－1368年、その寿命は、宋・明・清に比べてはもちろん、遼・金よりも短い。その理由は、帝位継承のたびごとに、皇族間の紛争が起り、中央政權が不安定であったことによる。この元朝時代の3分の1は、創設者世祖フビライの治世が占めるし、同朝末期には、武宗から寧宗まで25年間で8人の皇帝が立っ

ている。ただ最後の〈順帝は在位35年にわたり、長さの点では世祖を凌ぐが、しかし単に長いばかりで一向に見栄えのせぬ長さであった。〉〔433頁〕

元朝の帝位継承に伴う混乱は、遊牧民の相統習慣に原因をもっている。〈五代、華北の軍隊には、北方遊牧民系出身の軍人が多く、彼らの間には、古代ゲルマン人と同じような共和的思想が、濃厚に保たれていた。すなわち彼らの君主は、相統さるべき地位でなく、代替りごとに彼らの間から推戴すべきものであると考えられていた。そこでローマ帝政末期の君主がゲルマン軍隊の中から推挙されたように、五代の軍人皇帝は、多く軍隊内の世論の動向によって決定されたのである。ただこれを中国の伝統的な立場からいえば、革命であり、篡奪であった。〉〔305頁〕

ヨーロッパから例を引くまでもなく、一般的に言って、定着農耕社会は安定しており、相統方式は世襲の方がよい。これに反して遊牧社会は不安定で(財産である家畜は、気候の激変や敵の襲撃から守りにくい)、したがってその指導者には、一種の選挙によって有能な人物を決める。元朝の場合も、この原則があてはまる。後継の皇帝には皇室中の強い人を選ばねばならない。だれが強いかは競争によってわかる。武宗〔428—9頁〕・文宗〔432—3頁〕の即位がその例である。

中国風世襲の方法として、いかに遠縁の者でも、相統するに世代を論じ、同世代を避けて、卑〔ひく〕い世代の者を選んで後嗣ぎとするのが、慣わしである。〉〔393—4頁〕宋朝の系図をみると、父から子へが多い。これが理想である。子(男の子。女の子は女という)がなければ、世代の下の子に伝えられる。仁宗から英宗へ、高宗から孝宗へ、寧宗から理宗へがそれである。兄から弟へ、例えば太祖から太宗へは異常とされているし、哲宗から徽宗へはやむをえないことであった。

世代が上って継がれるのは「逆縁」で、不吉とされる。金の章宗のあと、叔父の衛紹王が立ったが、逆縁だということで内乱が起これ、衛紹王は殺された〔393頁〕。上述の元の順帝も、弟寧宗からの継承で、これも逆縁である〔434頁〕。

なお元代において、成宗の死後、〈大臣らは、世祖の子で成宗には叔父に当たる安西王を立てようと謀ったが、これは逆縁に当たる〉〔428頁〕という。世祖の子のひとり、チンキムの弟、マンガラが安西王に封ぜられ、これはたしかに成宗の叔父に当たる。しかしこの時に擁立されようとしたのは、マンガラでなく、その子で父の地位を継いだアナンダであり、これは成宗のいとこであり、同世代であって、逆縁とはいえない。

日本の皇位継承法も、中国と同じく、父子相統を原則とする。皇室典範の第2条に、皇位継承の順序として、1. 皇太子、2. 皇長孫、3. その他の皇長子の子孫(以下略)と定められており、やはり下の世代へ継がれていく。

帝位継承について、元と清を比較して、宮崎『雍正帝』岩波新書、1950年(『アジア史論考』下、所収)にいう。「興隆期の清朝を中心とする満洲民族の気風の中には、もとより後進民族の成り上り者にまぬかれない幾多の欠点があったが、しかしまた一方、前代に覇を唱えた遼・金や元王朝に見ることのできぬ長所を具えていた。武力は蒙古のジンギスカンに劣っていたが、秩序を愛する団結心、協同体に捧げる犠牲的精神は、はるかに勝っていた。清朝初期の歴史は、皇位継承の問題から、し

ばしば内紛をかもしだしたが、そのたびに有力者の妥協が行われて、分裂を避け、危機を乗り切ることができた。康熙末年の皇子たちの内訌や、雍正帝のスーヌー家〔太祖の長子の子孫でキリスト教徒〕に対する弾圧などは、もしこれが元朝下の出来事であったならば、ただちに内乱謀反に発展する可能性があった。そのために元朝は、中国全土を支配してから、わずかに90年で亡びてしまった。しかし清朝の下では、一旦天子が即位して、君臣の分が定まれば、あえて武力を用いても自己の欲望を達しようとする皇族は存在しなかった。」(67頁) 清朝の皇位継承については〔519―20頁〕参照。

21 悲運な天子建文帝

建文帝〔453―6頁〕の最期は人の同情を誘う。『明史』本紀4、恭閔帝紀にいう。

「建文四年(1402年)六月、乙丑(13日)、燕兵犯金川門。左都督徐增寿、謀内応、伏誅。谷王穗及李景隆叛、納燕兵、都城陷。宮中火起、帝不知所終。燕王遣中使出帝后屍於火中。越八日、壬申(20日)葬之。或云、帝由地道出亡。正統五年(1440年)、有僧、自雲南至広西、詭称建文皇帝。思恩知府岑瑛、聞於朝。按問、乃鈞州人楊行祥、年已九十余。下獄、閔四月死。……自後、滇・黔・巴・蜀間、相伝有帝為僧時往来跡。」

やりてであった永楽帝に反対してか、この悲運の天子に同情が集まり、帝は死んだのではない、生きていたという噂があちこちに長く残ったと、明史は伝える。この天子について、自分のフィクションを入れず、史料だけを使って書いたのが、幸田露伴「運命」(『改造』1919年4月、創刊号)である。角川書店版、日本近代文学大系、6、『幸田露伴集』1974年には、福本雅一氏によるきわめて詳細な註を付けて採録されている。この項、杉山正明氏の御教示による。

22 中国近世の反乱

1. 塩徒によるもの

〈唐の肅宗即位の3年(758年)、政府は塩の専売法を実施した。……このとき以来、これが歴代政府によって踏襲され、ほとんど中国の国是であるかのごとき観を呈した。しかもその目的が軍事費に充当するにあつたので、税率がすこぶる高い。……原価の37倍にもなり、唐以後の各王朝も、だいたいこのぐらいの税率を維持して、清朝末まで及んだ。〉〔上、285頁〕

〈貧乏人が食っていけなくなった時にとる最後の手段は、秘密結社に身を投じて、闇商人になることである。幸いに塩の値段は、政府の手によってぎりぎりの線まで上げられている。官価が高ければ高いほど、闇商売はもうかるのだ。……彼らは警察によって追いつめられると、窮鼠かえって猫を噛む、公然と反乱を起こすのである。そしてこういう種類の反乱は機動性をもつのが特徴で、転々と地方を荒らしまわる。だからこれを農民反乱というのは不適当で、元来は農民であつたにし

ても、いったん秘密結社に入り、闇商人という社会的身分に変身したうえでの活動なのである。>〔336頁〕

官塩・私塩を問わず、塩を販売するには地理に通じていなくてはならぬ。どこに、どのくらいの、どんな人が住んでいるか、そこへ塩を運ぶには、何を使って、どこを通ればよいかなどについて、情報をもっていなければならない。「機動性」とは運輸手段、主として舟であろう。白居易「塩商婦」に、「風水為郷船為宅」の句がある。

これに反して農民は、毎日土地にしがみついて働くばかりで、遠くへ出かける機会も少なく、広い情報をもたない。また舟や馬などの運輸手段をもっていない。中国人の職業のほとんどが農業であるから、反乱集団を構成するのは主として農民ではあるが、農民が主体性をもって反乱を起こすことは、まれである。

元末の反乱者のうちで、方国珍〔439頁〕と張士誠〔442頁〕は、〈おきまりの私塩密売者で〉〈中国の反乱指導者の代表的タイプである。〉

例外として〈明代の鄧茂七の反乱だけは、正真正銘の農民反乱と規定してよさそうである。……北宋でいえば、方臘〔睦州の地主、365頁〕の乱が、これと若干あい似た性質をもっている。〉〔473頁〕

2. 失業者によるもの

黄河の改修工事が終わったあとの失業者が、元末の反乱に加わった〔438－9頁〕。明末の反乱は、飢民や飢軍が社会的必然の結果として起こした〔500頁〕。清末の義和団事件は〈大運河の運搬業労働者が、汽船の外洋運行によって職を奪われて失業したがために、外国文明を咀って起こした暴動なのである。〉〔542頁〕

3. アヘン密売買者によるもの

塩と比べると〈アヘンは、きわめて少量を単位とする商品で、潜行性が強く、もしそれが盛大に行われても、外部にその徴候を現わさない。〉〔531頁〕清朝の白蓮教の乱や、太平天国の乱は、アヘン密売買者が指導したとする〔530・36頁〕。

なお「阿片吸食」の「吸食」は漢語で、xi¹shi²、日本語では「吸飲」という。

〈太平天国について、著者は独特の見解を有し〉〔600頁〕、次のようにいう。〈清朝時代に長髪賊と称せられた太平天国は、近ごろになって、逆にその革命性・近代性が高く評価されるようになった。しかしこの運動は、旧来の中国社会の論理によって解明される部分の方が多く、異質的なものはかえって少ない。むしろ、この反乱を平定する主動力となった曾国藩の湘軍の方に、発展性をもった新要素が見出される。〉〔537－8頁〕「新要素」とは軍備の近代化である。

23 停滞の百年

19世紀半ばから20世紀半ばまで、つまり清朝末期と中華民国の100年は、中国史上の低迷期であっ

た。彼の地の住民の主体的生存を無視するつもりはない。外から見て価値の低い時期なのである。不振の原因は、国内の不統一と、外国の圧迫である(566-8頁)。簡単に図式化すると下のようになる。

ソ連——→ 共産党 × 国民党 × 日本 × アメリカ (——→援助, ×対立)

中国共産党が勢力を拡大して政権を取り得たのには、このように有利な国際情勢があった。結果的に見れば、アメリカの貢献が大きいといえる。アメリカは地理的に遠いから、日本と違って領土問題が起こらない。またアメリカには多数の中国人が住んでいるし、学者Owen Lattimore, ジャーナリストEdgar Snowらが、豊富な体験にもとづく有益な仕事を残している。アメリカの中国理解は、日本のそれとはかなり違ったものとして、我々日本人にとって参考になろう。

24 現代中国

〈由来、中国の事象は、欧米または日本に比べて、はなはだわかりにくいのが特徴で、人民共和国の時代に入ってから、それが一層わかりにくくなってきた。それは、報道がすべて厳重な統制の下に置かれるようになったからである。〉(573頁) わかりにくい事象をいくつか挙げる。

中ソ論争	1960年	(579-83頁)
文化大革命	66-76	(575-6頁)
劉少奇の獄死	69	
林彪の事故死	71	(576頁)
アメリカ・日本との復交	72	
対ベトナム戦争	79	
四人組裁判	81	

以上の出来事は、毛沢東支配期約30年間の後の3分の2に属する。ことに不可解なのが、末期の3分の1を占める文革である。権力者がだれに対して革命をしかけるのか。

文革中とその後の中国社会を描いた小説として、白樺「聴櫓居盛衰記」がある。発表は『文匯月刊』1, 1981年で、NHKラジオ中国語講座応用編(86年12月-87年3月, 講師:黎波氏)のテキストとなった。これさえ読めば、現代中国の真実がわかる。その内容を抽象化してまとめると、次のようになる。

1. 文革によって、生命・財産・時間・労力が多大の損害を受けた。
2. 文革後も、「幹部」が不当な権力を行使している。
3. 個人企業が抑圧されている。
4. 報道・出版の自由が制限されている。

日本人が文革について書いたものは、読むに値いしない。その一例を示す。

「中国、とりわけ文革期の中国のことを考えるとき、しばしば一つの事実に驚かされる。それは

封建制を乗り越えた資本主義をさらに乗り越えた社会主義の中国、とくに文革期には社会主義のなかでもさらに最先端を進んでいるはずの中国で、余りにも多くの封建的、というより伝統的世界が生き延びていたことである。」(1986年)

この程度の認識で本が作れるという日本の現実には本当に驚かされる。北京からの公式情報をうのみにするから、こういうことになる。これを教条主義という。実事求是という教えを忘れないで実行してもらいたい。

ま と め

凡例〔VI〕

1. 天子が即位した翌年に改元する。即位の年の内に改元するのは革命である。正常の例は、北宋の英宗から神宗へ〔339頁〕、革命の例は、同じ北宋の太祖から太宗へ〔383頁〕、元为天順帝から明宗へ〔432頁〕、明の景帝から英宗の復辟〔475頁〕。

2. 中国人の年齢は数え年による。現在、日本では満年齢を用いるが、これは細かすぎて不適當である。地球上には、自分の生年月日を正確に知らぬ人が少なくない。

総論1 歴史とは何か(“”は小見出し)

“歴史の個性”〈歴史は客観的な学問であるから、だれが書いても同じ結果になるという考えを棄ててほしい。・・・例えば、何年に或る国が滅びたという事実は、だれが見ても動かせない事実であるにしても、それがもつ意義の評価については、各人各様でありうる。・・・私は本書を草するにあたって、何よりも自己に忠実であろうと努めた。〉〔1-2頁〕

“事実の論理”〈事実と事実とを結びつけて網の目を造り、これまで足りなかったところを補い、もつれていたりまちがっていた網の目をほどこいて、正常にもどす、それが歴史学だと思っている。しかし世間では、こういう作業は歴史学のなかでもいちばん下等な仕事と見る人が多いようである。〉〔8頁〕“事実の論理”の反対は“言葉の論理”で、〈この派の人は、具体的な事実に出会うと、すぐそれを抽象化し、抽象しないかぎりは理解したことになる。〉〔6頁〕

“世界史的立場”〈我々はいかなる方法であれ、あらゆる知恵をしぼって、つねに世界史を念頭におき、世界史的立場から、もっとも具体的に個別の歴史研究に取り組む用意が必要だと思う。・・・広い地域に共通する問題ばかりが、世界史に関連するとは限らない。どこにもなくて一個所にだけある特殊な現象もまた、その故によって世界史に関連してくる。〉〔17-8頁〕

“現代史”〈人間の実生活には、たえず将来を予測し、将来に備えながら、現在の瞬間を生き、新しい歴史を作っていく一面と、また絶えず過去を振り返って過去を整理する一面とがある。そして過去を整理しておかなければ、明日の生活に支障を来すことになるのである。過去はそのまま消えていくものでなく、その中の必要な部分は将来に再生する。だから過去を整理するという仕事は、それ自身が生活の進行なのである。何だか反対の方向に向いているように見えて、実際はそのいず

れも、我々が生きていく間に起こる生活の営みにほかならない。〉〔18－9頁〕

“情報と選択”〈現実の世界の動きに直面して、これを史料として保存し整理していこうとする場合、いちばん困るのは、情報が多すぎることである。・・・するとここに、何を選ぶべきかという選択の問題が生じる。〉〔20－1頁〕これは現代日本の事情である。我々の対象とする中国史の分野で、注意すべきことは、文献が少数の特権階級——政府側・反政府側の区別なく——の手に成るということである。

Mediaeval Arabic literature comes almost entirely from the small privileged ruling minority whose privileges included the art of writing and the exercise of patronage. The rest, the common people, are for ever silent, except for such few echoes of their voices as can still be dimly heard. (Bernard Lewis, *op. cit.*, p.139-40.)

これは中世アラビア語文献についてであるが、漢文文献の場合も同様であろう。文献は、読み書きのできる少数の人と、そのパトロンたる政治権力者によって、作られてきた。そこでは民衆の声はほんのかすかに聞こえるだけである。特権階級の作文を使って、声なき民衆の実態を描くには、よほどの知的能力を必要とする。現代日本の場合、情報過多とはいえ、やはりそれは事実のごく一部が、少数者によって恣意的に選り出され、屈折を加えて提供されているものなのである。それは事実であって、嘘ではないかもしれない。しかし真実は別のところにあるかもしれない。雑多な情報からわずかの真実を選び出す、これが歴史学の英知である。

総論 2 時代区分論

教育的観点からは、中国史の時代区分を論ずることは、あまり価値がない。一般学生にとって、この問題についてのこちたき議論はおもしろくないだろう。研究的観点からも、時代区分論は実り少なく、それこそ「言葉の論理」に墮する恐れがある。歴史を書くものは、おのがじし、他人の意見によってでなく自分の意見に従って、区分すればよい。部曲・佃戸・荘園・都城などを、現代の若者は映像によって表現してほしい。以上、総論について。

本書の特色を挙げる。末尾に参考文献が載せられており、それは著者自身の著述に限られている。歴史学の著作として異例のことであろう。ここに著者の信念がうかがえる。一般論として、参考文献は数多く並べたらいいいというものではない。自分が本当に価値ありと信ずるものに限るべきである。価値の低いものを採用することは、その人の価値の低さを示すことになる。本書では、すべての叙述が著者自身の研究にもとづいているから、文章に厚みがあり、しかも世界的視野の中で、中国史全体にわたっていることに、高い価値がある。

批判を一つ。議論の分かれる問題について、著者は自分に反対の意見とその主張者の名前を記しているが、読者にとっては、両者の意見を比較して評価することは困難であるから、この場合には、自分の主張を出し、反対意見はごく簡単に紹介するに止め、相手の名前は出さない方がよい。本書は教科書であるからである。

最後に筆者の意見を付加する。この紹介では、「中国」の地域をChina Properに限った。これは秦

から明まで、約2000年間の領土で、まさしく中国固有の領土であるからである。清朝以後の歴史については、漢のほかに、満・蒙・回・蔵の諸要素を考慮に入れなければならない。さらに中国の外に住んでいる多数の漢人をも忘れてはならない。中国の政治体制に盛衰はあっても、その文明の価値は不変である。

くゝは本書からの引用文、その後の〔 〕は頁数、〔 〕中の文章は筆者勝藤の説明である。

正誤（○頁－△行目）

139－1 騎馬 → 騎射の方がよい（武靈王「胡服騎射」＝戦国策）。

215－5 暴虐なるため、その下に殺された。→ 部下（王允・呂布ら）。

317－2 矩形（現在この語は使われない）→ 長方形。

339－最後 翌年改元として熙寧元年とした。→ 改元して。

356－最後 第二の紹聖の政変で旧法党が復活した時 → 新法党。

400－11～12 中国流の諡では太宗と称する。→ 廟号（諡号・廟号は453参照）。

403－13 末弟旭烈兀 → 末弟は阿里不哥，409－後から3，および604系図参照。

416－1，426－7，428－4～5の伯顔は同一人物，435－1～2の伯顔は別人。

570－3～5 ABCD対日包囲網のCはカナダ → Cはチャイナ，中華民国。

578－10 遺鉢を嗣ぐ → 衣鉢（547－3）。

巻末の地図「近世王朝疆域国都図」イル汗国都はバグダッドでなく、その北方の湖（ウルミヤ、またはレザイエ湖）の東方、タブリーズ。